

佐伯尋常高等小学校の沿革

(その二) 明治年間 中

賛助委員 山内武麒

(佐田市山手区)

○ 体育指導者野村越三先生

前述の回顧誌の中にも出たが、当時特筆すべき職員は野村越三先生であつた。先生は夙に本校児童の体育方面並に修養方面に向つて、敬虔な態度で常に指導されて来た。先生の指導によつて培われた運動精神は、他日運動王国の名をほしいままにした佐伯スポーツを成育させたのである。朝起会に冷水浴を加へ、四十四年十二月より一月一日より)など、一つ一つ野村先生の創意によるものである。

野村先生の体育指導の一端さうかがい知るため、先生が残された「鶴の羽風」の全文を記してみよう。これは野村先生が書き残された唯一の貴重な体育誌である。

『 鶴の羽風 』

(原文のまま)

一、運動観

1. 運動に對せる思想

物事は先づ何んでもそれに対する考へ方が大切な様である。運動を生かすのも或は之を殺してしまふのも、

夫張運動に對する思想如何にありと云ふことが出来る。世の中には運動を以て単に遊戯事に過ぎないやうに思つて居る人が少からぬ。又少し進んだ人でも運動は単に体格をよくする為だ位に思つてゐる人が随分少くないやうである。

2. 思想の革命

けれどもかう云ふ思想から先づ改革して行かん以上は運動は決して生きて来ない。生きて来ないのみならずともそれだけ運動する為に却つて人間が悪くなるやうな傾向が起つて来ぬとも限らない。中学校などで野球をする為に生徒が落第計りするとか柔道をやる生徒が喧嘩體でいけないと云ふやうなことを聞くが運動と遊戯事のやうに思ひ、或は單に体格を作るため位に思つて居るやうでは寧ろ当然の結果と云はねばならぬ。

3. 運動の本領

運動とやるものば、こ迄も人間として立派になつて行かなければならぬ。其の身体が見事に発達するやうに其の智力も品性も磨かれて行かねばならぬ筈である。即ち活氣に満ちた氣象の強い品位ある人間を作らねばならぬので粗暴な生意氣な人間を作らぬが本旨では無い。柔和を謙遜などこ迄もやさしい人間を作るのが本旨であつて規律のない礼容の修らぬ方々の人間を作つてはならない。機敏であつて而も仕事に對して飽く迄も骨惜みせしめない所謂「働き手」を作るのが本旨であつて「グズリ」した所謂「さまけ坊主」や「遊公好き」を作つてはならぬ。要するに運動によりては全人格を鍛ふと云ふ事に着眼せねばならぬので、これでこそ運動に力を入れる価値があり運動に意味が出来るのである。

る。この本旨を辨へてこれを實際に成功させやうと思へば、必然の結果として運動と訓練とを結合せねばいけぬ。殊に總ての基礎を作る小學校では十分意識と熱心とを以て、克永く訓練上に重きを置かなくてはならぬ。

4. 第 一 步

私の學校に於ての訓練上第一に取つて居る方法は教師が真先に立つて運動をせよと云ふことである。私の學校に來たものは一番に運動帽と運動服とを作らなくてはならぬ。これは別に規定があること云ふのではないが、四辺の状況と児童の意向とが遂に余儀なく作らしめるのである。小學校での訓練の秘訣は云ふ迄もなく教師が無我になつて児童の中に這り込むに在るが特に運動は其の適例を最もよく現はして居るやうに思はれる。教師が出らねば運動ははずむものではないが又根柢ある大切な訓練は決して出來るものではない。

教師が真先に立つて野球をやり又はランニングへ徒競走とせよから児童は翕然として運動について來るものである。そしてこれが児童の方面に強く響くことは勿論であるが今では家庭に対して余程運動に対する考へへと變へて來たやうである。一般社会の人でも運動の意味運動の価値について真面目なる考へ方をするやうになつて來たのである。始めは「小供らしい」とか「あゝ先生はどうした先生だらう」と云ふ風に異様な眼で見ているものも後には「成程運動は決して遊び事ではない」と云ふ考へも出來て來てその児童の体カ品性が向上し行くにつれて寧ろ感謝の眼を以て見るやうになつて來たのである。

5. 第 二 步

運動の神聖と云ふことを知らしめる為には児童の頭には先づ運動を尊敬せよと云ふ念を起さしめるのが大切である。私の學校ではその手進一法として總て運動場に出た時には一切下駄をはかせぬと云ふことにしてある。殊に野球のキヤツキボールなどは十分この戒律を守らせて居るが下の靴はぬきぬきやうな時には跳足になつて活動せよと云つて居る。次に私の學校では運動する時には誰でも羽織を抜かせることに定めてある。これは寒中の戒律であるが苟も運動するやうな人間が寒いからと云つて羽織を着ながらやるやうなことはいけない。宜しく抜ぐべしと云ふ風に云つて居るのである。これなど大分児童の頭にも沁み込んでゐるやうで若しも羽織のままでは居るやうな事はない児童でもあると他の児童から大いに排斥せられるやうな傾向がある。

6. 第 三 步

昔の武士が擊劍道場へ這入つては必ず一定の服裝に身を固めたやうに、今日の精神ある柔道が夫張り一定の礼容を守つてやるやうに、どこ迄も精神的態度を以て運動にかからなくてはならぬ。

今日迄各々の経験によれば児童に於けることを毎日続けてやらせやうと思へば出席簿を調製するに限るやうである。

それ故私の學校では運動の出欠席を一つに記すことにはしてある。これは前云つたやうに児童を奨励する一つの方法であるが寧ろ今一つ大切な主眼は復等をして「運動は日々の大切な仕事である」と云ふことを知らし

める訓練の方法以外ならぬ。これによつて児童が運動を重大視するに至るのはたしかに事實である。

### 7. 勝敗の念

運動の中で最も面白く且つ訓練的価値の多いものは競技運動に若くもは無いやうである。私々学校ではよく好んで長距離の徒競走をやらせるがこの位児童の意力を練るに効果あるものはないやうである。長距離競走は誰でも苦しくてたまらぬ時がある。遂にはまあ一断まぢ一断と思ひながら駈けることさへある。しかし此の間に忍耐とか骨氣とか猛烈なる意志とか云ふ氣象は遺憾なく養はれるのである。しかし競技運動に於ける勝敗の念は訓練上余程注意せねばならぬ事である。吾々は競技の際にしばしば「勝て」と云ふ。或場合には「必勝を期して奮闘せよ」と云ふことさへある。とりなり一面に於ては「それは一つの遊戯に過ぎないではないか」という襟度と持たせるのが必要である。故に勝つてもそれほど鳥頂点に達することもない。負けてもくやしがつて泣いたり腹を立てたりすることもないのである。「負けじ魂」はどこ迄も必要であるがその手段はどこ迄も君子的であつてはならぬ。要するに「全力を尽して天命を待つ」と云ふ風に訓練するがよいと思ふ。

かゝりやうしても勝てばよいと云ふやうな気風は第一其の手段を迷はぬと云ふことになつて知らず識らずの間には卑怯陰險など云ふ悪徳を養成すると同時に人間をいじけさせて小さくすることは夥しいものである。私の学校では今の近隣競争にかけての児童の心情態度は割合に綺麗である。競技の爲にお互の間に悪感情を抱き合ふと云ふやうなこともなければ審判者に対して不

服を云。左り不潔と抱いたりすることもし始んどないやうである。子供ながら飽くまで学生らしく紳士らしき態度と持たせることが必要である。若しも競技運動が此の方面に於て正しくない頭でも発生するやうな事が出つては教育上甚だ憂ふべき事と云はなければならぬ。

児童を指導して行くものといつても教師でなくとも自ら放からず勝敗の念に対しては先づ教師の精神態度が最も必要である。

### 8. 運動と個性

児童の個性を知るには教室でも出来やうが最も都合のよいのは運動場である。児童は運動する時に其の天真を最もよく現はすやうである。一つの投げたボールのうちによつても其の児童の個性は分る。かうして若等は運動場に於て彼等が美点も癖も知らず識らずの間に非常によく知ることか出来るのである。

### 9. 運動と感化

子供の好きなものはいくつがおらうか其の中でお話と運動とが彼等の最大好物であることは事はれぬ。故に小学校に於てはよくこの呼吸をつかまへて適切な方法をとつて行く事が必要である。

すべて感化は多くの場合多く接するやうに行はれる。詳しく云へば児童の心情は多く接すれば接する程彼等を感化することにも亦強いのである。それ故に吾々はなるべく多く児童に近寄ることを正面しなけれぬ。彼等は彼等を感化することにはそれ程骨の折れる仕事ではないと思ふ。

10. 結論

要するに運動は各方面よりして人間を作るために甚だ大切であるが、小学校としては此の上子供に必要なる機会を得るために練習を一大対象とすると云ふことを宣明し度いと思ふ。

三、強行軍

一日に十六里

小学児童として一日に十六里位の道を歩かせるとは無理であらうか。若しも平素から十分に体力を鍛つて置いたら、それ程無理は有るまい。随分平気で行けるであらうといふ考から実行して見た処が案外に好成績を得たのである。今それに対する研究と云ふ程でも無いが、平素から多少練習してゐる有様を論じて見ようと思ふ。

2. ランニングの練習

私の学校は随分各種の運動は盛んであるが脚を達者にすること云ふ方の運動としては長距離の徒競走を盛んにやらせてゐる。尤もランニングは全身運動であるから、脚ばかりの運動ではないが其の内でも歩行力を強くすると云ふのが最も其の特長とする処である。

1. 練習の初歩

初てランニングの練習を始めようと思へば先づ最初は十所位の処から始めるがよい。そして始めから終まで余り教しく駆けずら同じ位の歩調を以て駆けゆるやう

にしなればは有らぬ。始めから若しおやうに駆けゆるはよくない。

4. 歩調と呼吸

一週間許りも其の練習を續けて居ると最早も脚がこら疲様になつて来る。さうすると今度は二十所位の処を駆けゆるやうにするがよい。そして此時頃からその呼吸と歩調とを合せゆるやうにするがよい。長距離のランニングはこれが甘く調和しないと身体に無理が行くし、又決して長くは駆けゆるれない。普通始めの頃は十分のくわ呼吸するから三足は一呼吸か或は一吸であるが、中頃からは二足は一呼吸か或は一吸かよいやうである。

5. 口を開いてはならぬ

次に注意せぬは舌らなむのはランニング中は決して口を開いては有らぬことである。口を開かぬことは苦しいことと永續しかれないが、呼吸機關を痛めては仕方がないからである。それで鼻の患人は長距離のランニングには既に第一の資格に欠けてゐると云ふことが出来るのである。それで割れて来るると今度は一里位の処から二里か三里或は四里五里位の処を駆けゆるせてもそんなに苦しまぬやうになつて来る。しかしこれ迄になるには大分下地が在るは勿論である。可成体力が出来て居る児童でなくては無理である。

6. ランニングは毎日やらせ

尚一つ云ひ度いのはランニングは毎日やるがよい。ランニングは単純な運動のやうにあらが決してさうでない。やりかかつて見ると随分趣味のある運動である。

それでは、可なり運動をした時などは、そのあとで十町位でよいから一寸駆けらせ、やうにするがよい。私の学校では、雨の降っている日でも駆け回ることがよくあるのである。ランニングは身体がだん／＼湿って汗が次第次第に出て来るので、非常に気持ちよい。

### 7. 水と大食

かう云ふ風に毎日々々練習して居ると、児童の方ではランニングのコツを大分覚えて来るが、その内でも水を飲んで駆け回れないとか大食すると苦しくて仕方がないとか云ふことなどを、知って来て、非常に節制をし出すやうである。どうせ運動をばりこんでやらぬやうな生徒はつまるゝ生徒のやうに見なされて居るのであるから、此の点などは非常に愉快と感ずることである。

### 8. 行軍生は二十一名

今度の大分行軍に行つた児童は、何れも高等科の二年生で、人数は二十一名であつた。それに附添の教員が二名、此の組は矢張り随分運動はして来た組であるが、昨年四月下旬二年になつてからは正式に毎日々々雨が降つても風が吹いても運動はかかすことなくやつて来たのである。それでランニングの如きも小学校として、は殆んど理想的に練習して来た積りである。

### 9. 体力に従つて四組に分つ

これは平素から体力によつて一組から四組まで分けてあるが、ランニングなどは主に一組は一組として団体で練習することになつてゐる。序に私立学校では色帽で分けてあるから一層景気がよい。

### 10. 距離と時間

学校から出発して常盤橋を廻つて帰ると二十七町ある。此の間を普通一の組で十三四分、四の組で十六七分位で帰れる。坂の浦を一周するには一の組で四十分はかからない。四の組で四十八分位である。この間には一つの坂を越す坂はならぬが、里程で云ふと二里はたしかにある。これは誰でも此の時間は少いと驚くのである。

小倉を一周するに一の組で一時間二十分位、四の組で一時間三十五分位ならよいやうである。里程は三里半以上ある。

### 11. 散歩旅行

或時散歩旅行と称して、辨当を腰にぶらさげて途中三つの坂を越して滑つて来たことがあるが、この時は全体を急ぐと一團として駆け回つた。途中で辨当を使った。りなんかした。が、時間は恰度二時間と五十分であつた。里程は五里位の事だ。それから午後二時間位授業を見て見たが、そんなにはんやりして居らなかつた。

### 12. 月に一回の登山

それから脚を達者にしたと云ふことから見ると、月一回の秀岳登山を忘れてはならぬ。我が都にて一番高い山は秀岳である。往復に登山以外に二つの坂を越えるのであるが、里程は七里許りある。始めの口はだいたい半腰などもすくられて、後には何のことはないやうになつた。これで見ても、脚は可成に達者になつて居たといふことが分るのである。

13. 十六里を十二時間にて行く

愈々大分行軍が定つて一日に十六里歩くと云ふことになると、それが体力の強い児童計りならよいが弱い児童も加つていゝのであるから多少の心配はあつた。それも何時間かかつても行きつけはよいと云ふのであれば何も心配しなくてよいが、予素の研究から判り出して見て此の行程を十二時間で行けると推定を下して見たのである。従つて予素の研究が果して合致するかどうか多少心配でならなかつた。

其の時の児童の体力を組にして見ると、一組七人、二組六人、三組三人、四組五人であつた。

14. 野津(八里)まで六時間

野津(八里)まで六時間十分。見送りに来ている児童の内の人々も、多くの先生に別れを告げてまを息が白く凍る寒天に勇ましくも出発したのである。佐伯越も難なく越えて野津に着いた時は丁度十二時であつた。これ迄は予定通り歩いた筈である。これ迄は足の用心と重ぬて歩いたがそこで一休みしてそれから四五里はへびへ出して一里を四十分位で歩き戸次左りから又静かに歩かうと云ふ作戦計画であつた。然るに足の股が至つて狭く学級でも一番歩行力の鋭い生徒がこの前後からだんだん後れ勝ちになつた。それがために本隊は大分所の入で殆んど一時間以上も待つことになつたのである。しかしその内の二人は親族の内によるので先に行つたが大分所に入つた時はまだ六時になつては居らなかつた。やがて一回か着いたのは七時半であつた。

15. 翌日は兵營見物

翌朝起きて見ると一同は平然である。足に豆を踏出してゐる人は一人位しけやない(どうも帰れるかと云へば股をたたいてへ大丈夫です)と勇んでゐるものがある。それからその日は午後兵營内を見物しその足で師範学校を參觀したかそれ程疲れて居る様子も見えなかつた。中には帰り途に電車と駆け比べして見たりするものもあつた。

16. 今日一日に十六里だ

一同で起したののは四時であつたが、宿の準備が後れたので出発は六時であつた。最後の一隊が野津(八里)に着いたのが十二時五分。そこで辨当を使つて一休みして再び出発した。これからは一歩一歩佐伯に近寄つたと思へば足はなかなかに軽いのである。佐伯峠を越す頃はそれでも大分疲れてゐたが、佐伯から三里程手前へ宇藤木と云ふ処に差しかかると、向ふから草鞋脚陣へ出装で学校の先生方が大きな生徒と共に十五六人現はれた。サ一旅行隊の元氣は大変である。急に歩調が早くなつた。大手を頻りに前後に振ると云ふ有様である。それから旅行中の面白い話や珍話奇話と語り下ら帰るのであるが、先登隊が帰校したのが五時四十五分。最後の二隊が七時半であつた。此の最後の隊は全く空腹のために歩行力が一二里手前から大いに減じたのである。

17. 歩行力と時間

途中で一里を何分位で歩くが詳しく計つて見たが普通四十五分位である。早い時が四十分、一番早かつた

の及三十九分であった。遅い時は五十二三分もかかる時があるが一番遅かつたのは五十四分であった。兎に角大体の成績は十六里を十二時間で歩いたと云へる。序に歩行力の鈍い一生は帰途は汽船で帰らせりことにした。

18. 目出たし

要するに小学校としてこの位の強行軍は初めて見てもそれ程困難でないことと証拠立てた様である。平素からよく練つて置けば小学校児童と雖もこの位の体力は出来得られると云ふことを知り得たと思ふ。

(鶴ヶ井風終り)

研究

佐伯と国木田独歩

(其の一) 説明板より

会員 山本 保

佐伯駅以下車しす寸と、プラットホームの名所案内板が目にとまります。文面は左の通りです。

(一)

小羊鐘乳洞 天然記念物

南十四料 バス 五十分

養賢祥寺 禅宗妙心寺派専門道場

南西二料 徒歩二十分

香匠川魚つり場

南東六料 バス二十分  
浦代峠 吉野桜の名所  
南西十二料 バス一時間  
鶴ヶ井城址  
南西二料 徒歩二十分

(注) ① 小羊鐘乳洞は本庄村にあり、佐伯市養生(旧西上浦村)にも養生鐘乳洞があります。

② 養賢寺は佐伯城主初代毛利高政の建立によるもの。旧藩主毛利家の菩提寺でした。

③ 香匠川は、本庄村景道沿い、国道二七号線(国道)より縁沿いが魚つりの通所です。

④ 浦代峠(米水津村)はトンネル開通によって、バス所要時間が半減されました。

⑤ 鶴ヶ井城址のある城山の高さは一四〇mです。

⑥ 上浦新津井公園、蒲江新遊楽地、知の浦峠も吉野桜の名所です。

⑦ 蒲江町、鶴ヶ井海岸も最適の漁場(釣り場)です。

⑧ 佐伯市養生バス停留所近くに次々ような標識塔が建てられています。(佐伯市宮の下筋湯水道揚水ポンプ室敷壁に)

(古側面文字) 佐伯市役所観光課

(正面文字) 登山口から一五〇mの所に養生鐘乳洞、更に一五〇mで戸ノ下滝がある。見上げる断崖絶壁の下を進むと、約三〇〇mでオバネに達し、水が頂上下着く。オバネ(尾根)

麓から頂上まで約二、三〇〇mです。

(古側面文字) 彦蔵登山口 西へ約二km

(二)

また、佐伯駅(プラットホーム沿い)小荷物取扱所の壁板に、次の文章を刻んだ文字板(彫刻板)を見事な芸術